

論文の内容の要旨

論文題目 院政期仏画と唐宋絵画

氏名 増記 隆介

本論文は、日本絵画史の中でも特に平安時代後期から鎌倉時代初期に至る、いわゆる院政期に制作された仏教絵画（以下、仏画）をその主要な研究対象とする。本論文で構築した研究方法は、各作品の詳細な観察、作品記述を基礎として、作品の具体的な制作過程、すなわち図像の来源、線描、彩色、加飾等の手順や技法を復元することをその出発点とする。その上で、それらの総体として、作品にあらわれた絵画様式をわが国の作例のみならず、中国の唐代から五代を経て宋代に至る現存作例や既に失われ文献等から復元される作例と比較検討するというものである。

このような検討作業を通じて、当該期の仏画における唐宋絵画受容のありようを、図像のレベル、技法のレベル、それらをあわせた様式のレベル、といった各種の位相において作品毎に個別具体的に明らかにする。そして、そのような受容が可能となった歴史的状況を復元し、さらにその背後に広がる歴史や宗教史の状況へと考察を及ぼす。全五部にわたるこの考察を通じて、わが国院政期の仏画が東アジア世界に広く開かれた絵画史上貴重な作品群であることを実証する。このような美術史観は、夙に小野玄妙等によって第二次世界大戦前に用意され、近年においては、戸田禎佑氏（戸田禎佑『日本美術の見方—中国との比較による—』、角川書店、1997年）や戸田氏の見解の中でも平安絵画と唐代絵画の関わりについて批判的に検証した佐藤康宏氏（「中国絵画と日本絵画の比較に関する二、三の問題」、『第16回国際シンポジウム 東洋美術史研究の展望』、国際交流美術史研究会、1997年）等によって提示されたが、個々の作例の技法レベルにまで踏み込んで個別実証的に検討されることはなされていない。また、このような研究方法は、近年、日本史学、仏教史学、東洋史学等、歴史学の諸分野において盛んな日中交渉史研究を現存する作品を通じて再検証する意義をも有するであろう。

本論文の構成、及び各部、章における考察の概要は、以下の通りである。

第1部 院政期における仏教絵画

第1章 院政期における仏教絵画—唐宋絵画受容の視点から—

第2章 院政期仏画の技法—絵画技法から見た院政期仏画の流れ—

第2部 孔雀明王像と唐—北宋の密教

第1章 孔雀明王画像論

第2章 「紙本白描応現観音図」と呉越国

第3章	「応現観音図」と五台山図
第4章	高山寺「仏眼仏母像」研究序説
第3部	普賢菩薩像と呉越国—北宋の天台仏教
第1章	普賢菩薩画像論
第2章	東京国立博物館「普賢菩薩像」の図像と表現
第4部	普賢十羅刹女像の成立と東アジア
第1章	普賢十羅刹女像の成立をめぐる諸問題
第2章	和装羅刹女像の生成—宋と日本への二つのヴィジョン—
第3章	益田家旧蔵「普賢十羅刹女像」について
第4章	奈良国立博物館「普賢十羅刹女像」について
第5部	南宋杭州の仏教絵画と日本
第1章	永保寺「千手観音像」の図像と表現—「天竺観音」との関わりを中心に—
第2章	山梨県—蓮寺所蔵「釈迦三尊十八羅漢図」について—その東アジア絵画史上の位置—
第3章	南都眉間寺旧蔵「十六羅漢図」について—重源と羅漢図の請来—

第1部では、本論文全体の概要が示される。そこでは、院政期に先立つ藤原道長（966～1028）による撰関政治の時代から後白河院政期（1158～92）にいたる仏画の様式展開について、当該期の世俗画の展開をも視野に収めながら唐宋絵画の受容という観点から概観する。その際、北宋及び南宋時代に相当する当該期において、過去の様式である唐代美術の供給源として、その多くを唐由来とする正倉院宝物とともに東大寺、興福寺等、南都諸寺に伝存した天平美術の様式が、唐代美術を反映したものとして重要な位置を占めたことを明らかにする。そして、そのような作例が当該期における宋代美術の選択的受容に際して、その判断基準となる美意識をも育んだことを示す。また、院政期仏画の作画技法について、当該期の史料を用いながら、さらに近年の修理等で明らかとなった制作技法の具体相などと比較検討する。このことを通じて、史料の記述をより立体的に浮かび上がらせるとともに、その技法が生みだされた背景について唐宋絵画の技法と比較しながら概観する。そして、院政期仏画と唐宋絵画の技法上における共通性と差異とを明らかにする。

第2部においては、密教における孔雀明王という主題を取り上げ、平安時代初頭の空海（774～835）による我が国への孔雀明王信仰の移入と造像、その院政期を通じての継承の様相を明らかにする。他方で宋代における孔雀明王像の造像と信仰の様相とをそれらと比較することによって、日宋間における絵画史的、仏教史的状況の相違を浮かび上が

らせる。

さらに、北宋における仏画様式の形成に多大な役割を果たした呉越国における仏画様式を呉越国王・銭弘俶（929～88）によって開宝七年（974）に開版された「応現観音図」の考察を通じて明らかにする。あわせて、「応現観音図」制作の背景に唐末から五代期にかけての五台山信仰の隆盛があることをその図像から解明し、「応現観音図」のわが国への請来と奈良金峯山への五台山信仰の移植が併行する関係にあることを明らかにする。

第3部、第4部においては、『法華経』をめぐる普賢菩薩信仰とその造像を取り上げ、北宋に先行する呉越国における天台仏教信仰との関わりをいくつかの作品の比較を通じて指摘する。また東京国立博物館「普賢菩薩像」の作画技法に仁和寺「孔雀明王像」に代表される北宋における仏画の制作技法が受容されていることを明らかにする。

さらに我が国にのみ作例が遺る普賢十羅刹女像の成立と展開とに注目することにより、当該期の仏教絵画における「和様化」の様相、その意義を対外交渉史、我が国固有の神道との関わりを視野に収めながら考察する。そこでは、仁平二年（1152）制作とされ、表紙に和装の十羅刹女があらわされた「扇面法華経冊子」（四天王寺ほか）の制作年代について新たな観点から再検討するとともに、同じく見返に和装の羅刹女をあらわす長寛二年（1164）、平清盛（1118～81）奉納の「平家納経」（厳島神社）が「扇面法華経冊子」の存在を強く意識して制作されたことを示し、「平家納経」成立の新たな背景を見出す。

第5部では、中国では夙に失われ、我が国にのみ伝存する南宋時代の仏画及び鎌倉時代にそれらを詳細に写した作例を取り上げ、南宋時代に皇帝の行在となった杭州（臨安府）における仏画様式の成立について、各種文献を渉猟しつつ復元的に考察する。具体的には、北宋成立以前に杭州を都とした呉越国の仏画様式と北宋の都であった開封において後蜀、呉越国、南唐の絵画様式とが混淆しながら形成された北宋仏画様式の二つの様式と形成期における南宋仏画との関わりを考察する。すなわち、杭州という場に南宋初期に伝存していた呉越国の各種の遺品やそれら先行する様式を学んだ在地の画家たちによって咀嚼された呉越国の仏画様式とその多くは北方の金に持ち去られたとはいえ、一部がかろうじて南宋・高宗（1107～87）周辺に伝えられた開封における北宋中央の仏画様式が、杭州という場において、家学としての仏画制作から出発した馬氏一族や劉松年等の画師たちによって咀嚼され、南宋における仏画様式が成立する様相を明らかにする。また、眉間寺旧蔵「十六羅漢図」、一蓮寺「釈迦三尊十八羅漢図」、永保寺「千手観音像」等、各作品の様式検討を通じてその制作時期を特定するとともに、それらを日宋交流史上に照射することによって、重源（1121～1206）等、各作品との所縁が想定される僧を特定し、それらがいつ、如何にしてわが国に伝えられ、院政期仏画の様式形成にどのように寄与した

のかについても考察する。

以上で概観したように、本論文は、日本絵画史において、その古典を形成したとされる摂関政治期から院政期に至る時代の仏画の様式形成について、従来のわが国固有のいわゆる「国風文化」の形成といった狭隘な視点とは異なる東アジア絵画史上の位置の再検討という観点から考察するものであり、日本絵画史研究に新たな地平を開くものである。

また、本論文に示される各作品についての詳細な作品記述や近年の修理過程で明らかとなった最新の情報は、保存のために多くの研究者によるくり返しの調査が困難な状況にある当該期の仏画の現状を記録し、また広く学界、一般に周知する役割を果たすものであり、後学へ果たす学的役割も大きい。あわせて、本論文は、近年の対外交渉史を中心とする歴史学研究、新発見が重ねられている中国における考古学研究の成果、特に後者については、中国現地での調査をも実施し、これらを反映することによって、美術史学内にとどまらず、広く我が国の人文学の諸研究に寄与する内容をも含むものとなっている。